

共同研究 ● 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界（2013-2016 年度）

本共同研究は、宗教的現象自体やそれを理解するための認識・解釈の枠組、および宗教概念などについて、最近 2、30 年間で大きな変化が表面化しつつあるという認識のもと、新たな宗教研究の方向性と手法を模索する目的でスタートし、すでに 3 年目を迎えた。昨年度はメンバーによる国際学会（国際宗教学宗教史会議世界大会、国際人類学民族科学連合）でのパネル発表、年間 4 回の研究会開催を行なった。成果のとりまとめを具体的に考える時期に入ったので、今までの研究活動で学んだことを私なりに整理してみたい。

「宗教性」

本共同研究を立ち上げた当初、「宗教性」と「ポスト世俗主義」というキーワードは、本研究課題と重要な関連性があることは分かっていたが、どのように定義して使用すべきかについては、かならずしも明確ではなかった。この 2 語に対する見方が定まってきたのは、比較的最近のことである。

まず「宗教性」について、普段私は、「生者たちだけで責任のもてる領域」を越えた想像力と実践を要請しやすい問題意識を表すものとして使っている。「宗教」が宗教的問題意識に対する応答として人為的に「創出されたもの（体系）」だとすれば、それを「創出するもの」が「宗教性」である。学部生に説明するとき、私はよく図 1 のような火山の比喩を使う。すなわち、その時代の宗教性がその時代の宗教を生み、時がたてばまた新たな宗教が生まれる。ただし、時代や場所によって宗教性の質が異なるので、創出されたものがつねに見慣れた形態を具えた「宗教」になるとは限らない。スピリチュアル運動は、山の形が定まらないキラウエア火山のようなものだし、ナショナリズムや市民宗教は、山らしい形を具えていても海中（＝政治領域）にあるためにそもそも「山」と認識されにくい。しかし「宗教」の形態や時代背景がどう変わっても、この世に生まれた人間は皆、宗教的な問題（宗

教性）を抱えている以上、宗教的な探究も宗教研究も必要だ、というわけである。

ただここで気になるのは、「宗教性」と「宗教」の循環が起こっていることである。「宗教」を生みだすものを「宗教性」と呼んでしまえば、そこから「宗教」が生まれるのは当然ということになりかねない。そんな論理的カラクリを作っておいて、「『宗教』は変化しても『宗教性』は不滅だから『宗教研究は必要だ』」と言うのは、宗教研究の縄張りを守ろうとする自己保身ではないか。そのことに拘泥した私は一時期、「宗教性」に相当するものを「宗教」という言葉抜きで表現しようと必死になったが、そんなことより重要なのは、「宗教性」に相当するものをもっと具体的に定義することではないかと今は思う。するとそこに見えてくるのは、宗教的な問題群とその前提条件である。他にも問題設定の抽象度を変えればさまざまな具体的課題を挙げられるが、おもに次のようなものが考えられよう。

- ・ どうすれば意味ある生き方や死に方ができるか⇔生と死には正しい意味がある
- ・ 死者・霊・神・仏等と、どのような関係性をもつのが望ましいのか⇔自分（たち）は死者・霊・神・仏等との関係性の一部を生きている
- ・ どのように不幸や悪を受け入れればよいか⇔生者には責任のとりようのない不幸や悪がある

かつては一般に、こうした「宗教性」（宗教的諸前提と問いが表裏一体になったもの）と、「宗教」（応答）が循環すると、無意識的に想定される傾向があったが、現在はそうではない。3者それぞれの内容も関係性も社会的条件の変化によって変わりうる。たとえば科学技術の発達によって「生者には責任のとりようのない不幸や悪がある」という前提が成り立つ領域自体が縮小し、「不幸をどう受け入れるか」よりも「不幸をいかに減らすか」とか、「いかに深く考えないようにするか」という問いに向かう傾向が顕著である。そしてそれらの問いは宗教的問いではなく、技術的ないし心理（学）的な問いであると認識されている。また、死者の靈魂の存在という前提は変えないまま、公共の慰霊施設を作ることが「非宗教的な」応答であると考えてる人もいる。あるいはガイア仮説のように、環境学的関心の高まりから、自分の生命はあらゆる生物の生命循環の一部だという脱人間中心主義的な感覚が、宗教性を帯びて強まることもある。ようするにこの 3者とその関係性は、それぞれの時代ごとに措定された宗教と非宗教の境界など無視して変化するのであり、その変化のどの部分を世俗的と呼び、どの部分を宗教的と呼ぶかは、その時代と場所の社会的政治的条件によって決まる。

これは本研究会でほぼ共有されているアサド的な見方だが、アサドは「世俗的なもの」と「世俗主義」の両者を区別している（Asad 2003）。そこで、もう 1 つの気になるキーワードである「ポスト世俗主義」も含めて考えてみたい。

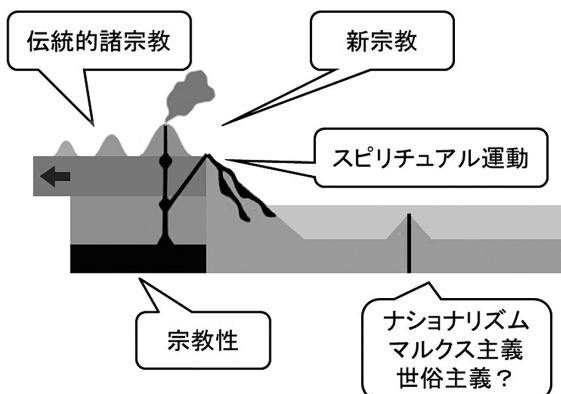


図 1 「宗教」と「宗教性」についての考え方
 (Wikipedia「ホットスポット」の画像から筆者作成)
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9B%E3%83%83%E3%83%88%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%83%E3%83%88_%E5%9C%B0%E5%AD%A6

犠 牲 者 追 悼 式

「ポスト世俗主義」

近年欧米では旧来の世俗主義の乗り越えを企図した「ポスト世俗主義」の議論がさかんである。旧来の世俗主義は、世俗的なものと宗教的なものを対立的に捉えて両者を区別し、公的領域においては世俗的制度や実践のみを許容しようとする。これに対してたとえばテイラーが提唱する新しい世俗主義のあり方とは、宗教だけをことさらに敵視するのをやめて、諸宗教とそれ以外の諸思想とを公平に扱い、多様性に誠実に対応することである（メンディエッタ・ヴァンアントワーペン編 2014）。これは魅力的な議論だが、公共性の観念がつねにベースにあることに留意せねばならない。ポスト世俗主義の議論は、公私の区別をしたうえで公的領域をどうするかという、かなり意識化されたレベルでの制度論なのである。

しかし先に見たように、宗教性が非宗教的な領域と関わりながら様々な変容パターンを示すことが想定される以上、制度化した諸宗教と世俗主義の境目がくっきり引かれているように見えるのはごく一部で、実際にはずっと曖昧で幅があり、両者の区別が問題化しない広大な領域が広がっているはずである。アサドは概念の系譜学を辿るフーコー的な手法を用いて「世俗」「世俗主義」「世俗主義化」を順に論じたが、特に「世俗」の領域には、世俗主義や諸宗教など、一定の形式性を具えた「～ism」が立ち上がる以前の、流動的で多様な思考のせめぎ合いがあるように思えてならない。ポスト世俗主義論（世俗主義論も含む）は具体的な手がかりを探しやすいテーマかもしれないが、われわれは茫漠たる世俗領域に着目し、「宗教」以前の「宗教性」の変容まで視野に入れた研究をしたいと思うのである。

今後の展望

それは一言で言えば、世俗主義の人類学ではなく、世俗（と思われる）領域での宗教（／世俗）人類学である。世俗的だと自認している人々が、従来「宗教」に丸投げしていた宗教性からむ諸問題に、どうと組んでいるのかについての研究である。そこではあえて宗教的前提や問いから出発することで、自分自身を含む世俗的な人々の人生観／世界観を異化する作業も必要となろう。

こういう視角の研究がどれくらい新しさを主張できるのかは、先行研究をもう少し読み直さねばなんとも言えない。たとえば教学や信条よりも実践を強調する実践宗教の人類学には共感するところも多いが、あくまで（世俗的）研究者が文化的他者の宗教活動を研究するという立場であったように思う。また、近年の民俗学のなかには現代的な日常を見つめ直す研究があるが、宗教性にははじめから関心がなかったり、関心があっても日本や東アジアの宗教的心性の話に収斂しやすい印象がある。個人的にはアメリカの世俗領域から個人主義や市民宗教を析出したロバート・ベラーの研究（1991）は、本研究にとってよい見本になると思うが、われわれはそれと同じことを現代世界においてやろうとしているのか、それとも方法論的にもっと違う要素が出て来るのかは、実際の



雲仙普賢岳噴火災害 20 周年犠牲者追悼式で標柱に向かう消防団員（2011 年 6 月、長崎県島原市、西村明撮影）。

調査をしながらこれから見極めることになりそうである。

いずれにせよ、私たちが「世俗」と思って生きているこの世界で、宗教的諸問題はどうなっていくのか、一口に「世俗」と言っても時と場所によってじつは相当に異なる経験なのではないか、といった問題は、私にとって切実なのである。それは私自身が、宗教の魅力を感じながらもはまり込むことには二の足を踏み、しかし宗教的想像力や実践が痩せていく（ように見える）ことには危機感をもってしまう人間だからかもしれない。

世俗的なものと宗教的なものとを同時に形成する混沌とした下地としての広大な実践領域のなかで、従来の宗教的問いと前提と応答はどのような変容（場合によっては消失、転位等）を遂げるのか。研究会では世俗的 NPO と宗教的 NPO の比較、世俗の人々にとっての慰霊、巡礼的観光など興味深いトピックが挙がっている。簡単には捉えがたい領域が対象なだけに、具体事例の選び方や分析の着眼点は、今後の研究の展開にとって大きな鍵となろう。

【参考文献】

- Asad, Talal 2003 *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*. California: Stanford University Press.
- ベラー, R. N. 1991 『心の習慣』 島園進・中村圭志訳 みすず書房。
- メンディエッタ, E. J. ヴァンアントワーペン編 2014 『公共圏に挑戦する宗教—ポスト世俗化時代における共棲のために』 箱田徹・金城美幸訳 岩波書店。

ながたに ちよこ

九州大学大学院比較社会文化研究院准教授。専門は、文化人類学的手法による中国宗教研究。著書に『シャンムーン—雲南・徳宏タイ劇の世界』（長谷千代子訳著、岳小保共訳、雄山閣 2014 年）、『文化の政治と生活の詩学』（風響社 2007 年）、論文に『「宗教文化」と現代中国—雲南省徳宏州における少数民族文化の観光資源化』（川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』（昭和堂 2013 年）など。